

## 鹿児島方言における外来語アクセントの変化について —なじみ度との関係を中心に—

松田 菜里

**要旨** 鹿児島方言若年層の外来語のアクセントについて、木部・橋本(2003)を参考に、同論文の若年層より 15-20 年程度下の人のアクセントを内省調査した。その結果、以下の 2 点については、木部・橋本(2003)の指摘と一致した。①外来語のアクセントは A 型が多数を占めるものの B 型の語が増えてきており、B 型の語は東京の平板型と一致している。②外来語の複合語は複合法則が崩壊し、最初の要素のアクセントと無関係に A 型になる。外来語の複合語に B 型が現れないのは、東京で外来語の複合語に平板型がほとんどないからである。

しかし、①について、木部・橋本(2003)の若年層より下の世代でも B 型の語はそれほど増加していない。同論文は B 型とするが、A 型で発音している語も案外多いのである。なじみ度とアクセントの関係を調べたところ、同論文で B 型・今回の調査で A 型の語は、なじみ度が高い傾向があることが明らかになった。なじみ度はその語を知った時期とよく使うかどうかによって決定した。

従って、これから増えていく、新しい・なじみが薄い外来語のうち、東京で平板型のものは B 型で発音する、つまり、これからさらに B 型の語が増えていくと考えられる。しかし、木部・橋本(2003)の若年層でなじみ度が低いため B 型だったものの一部は、筆者の世代にとっては生まれたときからあるなじみ深い言葉となったため、A 型化するという逆転現象がみられた。本来は鹿児島方言ではなじみの薄い語を A 型で発音するため、外来語は和語・漢語に比べて圧倒的に A 型が多いのだが、ここでは、「鹿児島方言では、外来語のアクセントは A 型が原則」という規則を働かせたものだと思う。この結果をみると、一旦 B 型で受け入れた外来語が、古くなって A 型化していくという可能性があるため、単に B 型化だけが起きているわけではない。